

シンクタンク

今年の中庭のケヤキも、少し芽吹きが遅れているようです。しかし、表面からは窺い知ることが出来ませんが、木の中では、着実にその準備が行われているはずです。

昨年度、総合教育センター「あすなろ」も、組織改編を行い、「静岡県の教育」の芽吹きの準備に取り組みましたが、芽吹きに向けては、もう一つの大きな準備が残っているのではないかと我々は考えました。

それは、開所以来10年が経過した「あすなろの10年間」をどのように評価するかということでした。

そこで、平成7年8月のスタート以来の研修や事業を整理し、組織改編に至るまでの足跡を、教育改革の動きを合わせてまとめることにしました。

初代の杉田所長以下、「あすなろ」に関わってこられた先輩諸兄に、それぞれ10年間に取組まれたことやそれに対する思いなどを語っていただきました。

寄せられた文章の中には、「自立的学習」という言葉、あるいは「ニーズ」という言葉があり、生涯学習社会に向けての教育改革の柱となる「個の学び」の問題が、すでに語られていました。「不易と流行」を語られ、改革期の基本を指摘された先輩も居られました。「理念と実践」という言葉で、改革における方向性の大事さを語られ、「目利き」という言葉では、学校現場を支えることの重要性も述べられていました。

そして、みなさんが異口同音に言われたのが「シンクタンク」としてのセンターの役割でした。

こうした言葉から窺い知れるのは、センターが、常に学校現場と繋がって、一人一人の教職員、広くは県民とともに、教育改革の方向を正しく見定めて歩んできたという自負です。

「揺れていた」「失われた」という言葉で語られることの多い中で、センターの方向性は確実であったということです。そんな皆さんが、特に力を込めて語られたのが、方向性は「研究の充実」から生み出されるということです。

今年度の研究も、この見定めにつながるものと考えております。

特別支援教育課の『特別支援教育コーディネーターの実際に関する調査・研究』は「ニーズ」であり、「学習者の自立」です。

『学校の自主性・自律性を確立する学校経営』にあたっては「理念」が重要であり、『学校における教育の情報化推進のための協働的な方策に関する研究』や、『小・中・高等学校における学校英語教育の連携の在り方とその一貫性にかかわる研究』は、学ぶという「不易」なものと、現代的な課題という「流行」を押さえております。また、『小学校理科における探求的な活動を促

『観察・実験』や、『不登校児童生徒の支援に関する研究』は、目の前の子どもたちに対する優れた「目利き」を育成するものです。

これらの研究に見られる「理念と実践」の確実な成果は、10年の流れを受け継いで、改革時代の学校現場を支え、「学校づくり」が進展し、学習の場としての学校が外に向けて開かれ、地域では生涯学習の理念に立った創造的な学習が広がっていきます。

一人一人の教職員はもちろん、学校を取り巻くすべての方が、これらの研究を明日の実践へと繋げていただければ幸いです。

平成18年3月

静岡県総合教育センター 所長 天野龍生